時評

続・ＡＩについて

佐佐木定綱

少し前にも書いたが、「短歌研究」八月号で「ＡＩ短歌の時代に備えよ」という特集が組まれ、私も座談会に参加し、知識や見識が少し深まったこともあり、続きを記したい。

とりあえず現状では「ＡＩ短歌の時代」などというのは到底ありえない。机上の空論以外なにものでもないということがよく分かる「ChatGPT歌会」。歌人らが実際にChatGPTを使ってみて、歌を出力させ、できるだけいい歌を作ってみようという企画だ。

・ハルジオンよ　美しく咲き誇れ　その一瞬　人々の心に　希望を運ぶ

奥村晃作が作らせた一首。プログラムが一瞬で出力したといえば驚くかもしれないが、人が作ったといえば「美しく」はもっと踏み込んで表現できるし、「人々の心に希望を運ぶ」は抽象的にすぎる。歌会で痛い目にあうかもしれない。まあこの程度である。

「表層的」な言葉がよく出てくることから、山田航はＡＩにとって「日本の伝統的な詩」というもの全般が、抽象的かつ表層的な言葉を用いるものとみなしている集合的無意識があるのだ。」とし、本格的な短歌の議題になるには「日本語ネイティブによって作られた国産チャットボット」ができたときだろうが、そのときでも「短歌の知識がない日本人の〈私〉を反映した短歌になる。おそらく、ChatGPT同様に表層的な言葉が出力されてくるだろう。」と言う。なるほど、歌人は「てにをは」や些細な表現の違いに心血を注いで頑張っているが、大衆からすればそんなことはあまり大きな問題ではなく、表層的な言葉を並べておけば短歌、と見られている。これは開かれた表現というものを考えさせられる。

学習は特徴づけが重要で、現在の広範に対応可能なＡＩでは表層的なものしか作れないだろうが、クリエイティブに特化したモデルならばいい表現が出るのではと思っている。

・魔法の夜　月下に浮かぶ幻の羽根舞い降りたるは夜空を彩る

・沼に魚ぬめり月また水の面にぬめり幻想の中に私を包む

一首目は大塚寅彦によるもの、「月下に浮かぶ幻の羽根」というイメージはなかなかいい。二首目は奥田亡羊によるもの、「ぬめる」を入れてという指示のもとではあるが、「沼に魚ぬめり」はうまく処理されている。生々しい情景が想起されてよい表現だ。

生身の歌人が行っていることも言葉と言葉のつながりの程度を調整して、近すぎず、遠すぎずの言葉を持ってきて、比喩や二物衝撃、情景と心象などの構造に落とし込んでいる。やっていることは大して変わらない。

ChatGPTのような言語モデルはもう少しで比喩や表現の手助けとしてかなり力になると思う。そのまま名歌！というものは出来なくとも、八、九割ほどだいたいいい歌、ぐらいならそのうちできるだろう。そうなってきたとき、「短歌は作ったり理解したりするのに相当年季もかかるし、根性もいるからそんな面倒くさいものはもういいんじゃないかってなる可能性はあります」と坂井修一が言うのは案外突拍子もない話ではないのかもしれない。作品を生み出したい、表現をしたい、という根源の力が試される時代がもう少しで来てしまう。